

新実在論の視点による実証主義論争の再検討について

立命館アジア太平洋大学 清家久美

1 研究目的と方法

本報告の目的は、Maurizio Ferraris, Markus Gabriel ら、哲学における新しい展開としての新実在論の視点を通して、社会学における「実証主義論争」の再検討することである。

「実証主義論争」とは 1961 年にドイツ社会学会でおこなわれたシンポジウム「社会科学の論理」において、「批判的合理主義」を主張する K. R. Popper とフランクフルト学派の「批判理論」を継承する TH. W. Adorno のよって議論された論争を契機とする。その後、社会科学の方法をめぐる H. Albert と J. Habermas によって、論争は繰り広げられる。Popper は帰納的方法の採用の基準を観察者の反証可能性を境界設定基準として新たに設定する。独自の社会科学の方法論を提示したものの、彼が批判した古典的実証主義に見られる方法論的一元論の立場に回帰しているとも考えられる。一方で、Adorno は Popper の科学の社会的性格を射程に入れている点について評価したものの、社会科学の自己反省は方法論だけではなく、社会そのものを批判すべき、すなわち社会科学の方法論は社会科学の論理だけではなく、社会の批判理論であるべきだとの主張をする。また、Habermas は Popper に科学の客観性における価値自由について批判しつつも、独自の社会科学の論理を模索する。

本発表で扱うのは新実在論とは、M. Gabriel のそれである。彼は後期シェリングの「神話の哲学」研究をもとに、世界とは何であるかと問い、新たな哲学的展開としての新実在論を提唱する。彼はドイツ観念論において Kant 以来、伝統的に批判的踏襲された「理性」の外部に「事実存在」を設定し、その上で「世界は存在しない」ことを主張する。彼の主張は、自然主義や物理主義などの自然科学的な世界理解を存在論から批判する。Gabriel のこうした新実在論の視点を通して実証主義論争を検討することが本報告の目的である。

2 考察と結論

実証主義論争で問われていたことは、「知の近代」の問題であり、実証主義論争とは、J.S. Mill と W. Dilthey の実証主義、反実証主義という方法論的一元論と、方法論的二元論の対立、そして「批判的合理主義」の啓蒙観と「批判理論」の啓蒙観の決定的な違いを意味する[鈴木 1991]。それは「批判的合理主義」における「知識の成長」の過程だったのか、「啓蒙の弁証法」における「批判理論」の一種の新しい野蛮への過程だったのか、そのことを問う意義が、つまり「知の近代」そのものを問う意義が実証主義論争にはあると考えられる。

「世界はない」という Gabriel の主張において、世界のうちに生じるもののみが存在すると言われる時、そこで生じる存在を可能にする「世界それ自体」は「世界」のうちに生じてはいないのであり、従って「世界」は存在しない。「全体としての世界」の否定によって「それ以外の全てのものの存在」を肯定し、「意義領野」の多元性を保証する。「意義領野」を統括する唯一のメタ的存在を否定することで多元性の余地を残しているわけである。さらに、「理性」の外部に「事実存在」を設定し、その外部に神話的世界を含め多元的な存在を主張する。新実在論に見られる新たな視点は、「啓蒙の弁証法」における神話的世界からの解放のための啓蒙の理念の道具化や近代理性の道具的理性化、そして新たな野蛮への過程はその最初の神話世界の回復を可能にする、つまり新実在論は実証主義論争の根源的問題である「知の近代」の問題を解決する契機となりうる結論づける。

3 文献

- Adorno, Theodor W, Popper, Karl R et al., 1969, *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Neuwied/Berlin: Luchterhand.
(=1979, 城塚登・浜井修訳『社会科学の論理:ドイツ社会学会における実証主義論争』河出書房新社.)
- Ferraris, Maurizio (translated by Sarah De Sanctis), 2015, *Introduction to New Realism*, London/New York: Bloomsbury Academic.
- Gabriel, Markus and Zizek, Slavoj, 2009, *Mythology, Madness, and Laughter: Subjectivity in German Idealism*, New York/London: Continuum.
(=2015, 大河内泰樹・斎藤幸平監訳『神話・狂気・哄笑:ドイツ観念論における主体性』堀之内出版.)
- Habermas, Jurgen, 1970, *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, Frankfurt: Suhrkamp. (=1991, 清水他訳『社会科学の論理によせて』国文社.)
- Horkheimer, Max and Adorno, Theodor W, 1947=, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Frankfurt: Fischer.
(=2007, 徳永洵訳『啓蒙の弁証法』岩波書店.)
- 西原和久他編, 1991,『社会学理論のリアリティ:現代社会学のまなざし』八千代出版.